

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

ハムレットの悩み

狩野良規*

ハムレットの悩みはモナ・リザの微笑とならんで永遠の謎だといわれる。その謎解きに多くの人々が挑戦するものだから、諸説紛々、^{こうろんおつぼく ひゃつかさうめい}甲論乙駁、百家争鳴。結果は、論文や批評——僕は“攻略本”と呼んでいる——の山、山、山¹⁾。学問の世界、先行研究はしっかりと消化しておかなければいけないと躓^{しつ}けられる²⁾業界だが、ヘッヘッヘッ、冗談じゃない、そんな妄言を真に受けたら最後、肝心の『ハムレット』を読んでいる暇がない。

けれども、無手勝流で『ハムレット』をひもといても、謎は深まるばかり。混沌として無秩序、いろいろな挿話がてんこ盛り、物語は蛇行して締めりがなく、シェイクスピア劇 37 作品中で最も長い、およそ 4,000 行の戯曲。ノーカットで上演すると、4 時間におよぶ。

僕がシェイクスピアを読みはじめたきっかけは、大学 2 年生の時に手にした中野好夫の『シェイクスピアの面白さ』（新潮選書、1967 年）であった。今は亡き英文学の大先生、毒舌で鳴らした東大の名物教授は、『ハムレット』なんて支離滅裂だ、大学生が読んで最初から面白いと思えるはずがないと高らかに言い放つところから筆を起こした。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) ポーランドの演劇評論家ヤン・コットは『シェイクスピアはわれらの同時代人』に収められている「世紀半ばの『ハムレット』」を、「『ハムレット』について書かれた論文や研究の目録を作ると、ワルシャワの電話帳の二倍の厚さになる」という一句から書きはじめている（同書、蜂谷昭雄・喜志哲雄訳、白水社、1968 年、p. 62）。
- 2) 僕もゼミの学生や大学院生には、先行研究をしっかりと読めと涼しい顔で指導している。あな、恥ずかしや。

そんな中野節に励まされて苦節——いや、まあ、人並みに苦労して——18年、僕は40歳で初の単著『シェイクスピア・オン・スクリーン』（三修社、1996年）を上梓した。これが僕の主著。へへエ、残りの人生は余生だと思っている³⁾。そのシェイクスピア沙翁論の第1章を、『ハムレット』は支離滅裂な作品だという話から書きはじめたが、誰も中野好夫へのオマージュだと気づいてくれなかった。自分でバラすのは癪しゃくにさわるが、ここに告白しておく。僕なりに中野越えをめざしたんだけど。

で、何が言いたいかというと、以下、先行研究などものは、僕なりにハムレットの悩みは何だったのかを推測した一篇だと。『ハムレット』同様、いささか冗長になりますゆえ、ご容赦のほど。

『ハムレット』の名高き開幕シーンは、デンマークのエルシノア城の城壁の上。真夜中、番兵の交代時間である。まだ主人公のハムレットは登場しない。「そこにいるのは誰だ?」、「いや、おまえこそ。動くな、名を名乗れ」、「国王陛下万歳!⁴⁾」。舞台を初めて見て気づくはずはないのだが、最初に「誰だ?」と叫んだのは交代に来た番兵のバーナードー、対しておまえこそ名乗れと言いついたのは、いま見張りに立っているフランシスコである。逆ではないか。本

3) それまでは、「おまえも、運よく大学の教員になれたのだから、何か書いたら」と言われていたが、この沙翁本を出したとたんに「君、早熟だねえ」と。人の評価ってそんなものか。売れなかったけれど、専門家にはけっこう誉めてもらった。

僕は今日まで業績作りのための原稿は1本も書いていない。それが僕の唯一の自慢だ。もともと、付き合い原稿や頼まれ原稿はそれなりに書いたが。僕がこれまで綴ってきたものは、すべて“自分への手紙”である。学界への貢献など一切考えたことがない。学問は僕にとって“消費財”である。

で、映画を題材にしたそのシェイクスピア論を出版して、小さな一石は投じることができた。他人の評価は、以後ますます気にならなくなった。だから、その後は余生!

4) 英文を記しておく。

Ber. Who's there?

Fran. Nay, answer me: stand, and unfold yourself.

Ber. Long live the king! (I. i. 1-3)

難しい英語ではまったくない。

来、誰^{すいか}何するのはフランシスコの方だ。バーナードは相当^{おび}怯えている。また、「国王陛下万歳！」は暗闇の中での番兵同士の合言葉だが、この芝居、国王殺しの物語なのだから、痛烈な皮肉⁵⁾として響く。

と、油断がならない詩行。大学の英文学講読の授業では、「一字一句の世界だよ。シェイクスピアは舞台で見ると、テキストを読んだ方がずっと面白いよ」と、文学の先生ならばたいてい、そう^{のたま}宣う。中野好夫は、このちょっと先の詩行で、二晩続きで現れたという亡霊を、まず「例のやつ (this thing)」と言い、続いて「その恐ろしい姿 (this dreaded sight)」と述べ、そして「亡霊 (apparition)」と、衛兵のマーセラスが次々と言い換えていくのが見事だ、と⁶⁾。最初から亡霊とは言わない。読者ないしは観客に「何だろう」と想像させて、劇世界へ引き込む。そんな小さなサスペンスが張りめぐらされている。

僕も『ハムレット』への入口は、テキストの精読からだった。舞台で見れば、あっという間、しかしシナリオの密度の濃さには感心した。また、今でもイギリスの俳優たちの朗読を、40年も前にダビングしたカセットテープで聞くのが好きだ。

おっと、テキストの話をする、止まらなくなる。先へ進もう。

寒風吹きすさぶ夜中の胸壁で、マーセラスとバーナード、さらにハムレットの親友のホレーシオが、他界した先代のハムレット王に瓜二つの亡霊を見る。わが国は今、風雲急を告げている、先王がノルウェー王フォーティンブラスと一騎打ちして手に入れた領地を、同名の息子フォーティンブラスが取り戻そうと兵を動かしている。そうした折に先王の亡霊が現れるのは不吉だ。

ホレーシオらがそんな話をしている時に雄鶏が鳴く。僕の好きなホレーシオの短いセリフがある、「見よ、^{あかねいろ}茜色の衣に身をつつんだ朝が東の丘の露を踏みしめている⁷⁾」。ここ、舞台効果などにも要らぬ。達者な役者の朗じる詩を気

5) 劇的アイロニー (dramatic irony) と呼ばれる。登場人物が我知らずに口にしたセリフが、物語の状況を皮肉っぽく語っている時に使う文学用語。

6) 中野好夫『シェイクスピアの面白さ』新潮選書、1967年、pp. 71-73。

7) But look, the morn, in russet mantle clad, / Walks o'er the dew of yon high eastward hill: (I. i. 166-167)

を散らされることなく聞きたい⁸⁾。

1 幕 2 場。城内の大広間で、先王ハムレットの後を継いで新国王となった彼の弟クローディアスが、兄嫁のガートルードとの結婚を発表する。また、宮内大臣ポローニアスの息子レアティーズが、戴冠式のために帰ってきたが務めは果たしたので留学先のフランスへ帰りたいと願い出る。新王は、よかろう、と。さらに、甥のハムレットは——おっ、まだ父王の死を嘆いておるのか、これからは私を父親と思ってくれ、ここに宣言しよう、わが王位を継承するのはハムレット、おまえだ、と。だから、ヴィッテンベルクの大学へ戻りたいなどと言ってくれるな。

渋々応じるハムレット。だが、一同が退場し、舞台上にポツンとひとりになると、長い独り語りを始める。これが第一独白である。そう、「生くべきか、死すべきか」と唱える第三独白があまりにも有名だが、デンマークの王子は劇中で計 4 回（7 つと数える人もいる）、モノローグを口にする。その第一——あゝ、この硬い⁹⁾肉体が溶けてしまえばいい、この世は雑草はびこる荒れ放題の庭だ、

8) 僕が今までに見たシェイクスピア映画の栄えあるワーストワンは、ケネス・ブранаー監督・主演の『ハムレット』（1996 年、イギリス映画）である。4 時間 3 分のノーカット超大作。大予算を組み、名優を集めて撮影、アカデミー賞を狙い、しかしアカデミー賞を一つも取れなかった。まだ見ていない方はぜひ一度ご覧になっていただきたい。全篇、ケタケタ笑える。こうやってはいけないということを次々にやっている。1 幕 1 場の幕切れでは、ホレーシオが名ゼリフを語ると、スクリーンに茜色の空がワンカット映される。それも芸術的な映像では決してない、何の変哲もない、ただのきれいな朝焼け。これで原作の詩情を視覚的に表現したつもりか。

9) 比較検討すべき『ハムレット』の現存テキストは 3 種類ある。「第 1 四折版」(1st Quarto, Q1, 1603 年)、「第 2 四折版」(2nd Quarto, Q2, 1604 年)、そしてシェイクスピアの最初の全集「第 1 二折版」(1st Folio, F1, 1623 年)。シェイクスピアのテキスト研究をするならば、それらを全部比べて分析しなければならない。僕も 20 代のころ挑戦したが、すぐに挫折。例えばこの詩行、たいていのテキストは、F1 にある solid (硬い) を採用しているが、ニュー・ケンブリッジ版沙翁全集の編纂をライフワークにしたジョン・ドーヴァー・ウィルソンは Q1・Q2 の sallied を採用、それは sullied (汚れた) のミスプリントであろうと注釈をつけている。ウィルソンに準拠する福田恆存訳は「穢らはしい體」となっている。シェイクスピアも研究するとなると、まさに一字一句の世界！

この件、日本語で読める攻略本がたくさんある。とりあえず、大場建治『シェイクスピアへの招待』（東京書籍、1983 年）の第 3 講「ハムレットの肉体」(pp. 97-144) あたりからか。

父上が亡くなって2カ月、いや1月で母上が再婚するとは、「心弱き者、汝の名は女¹⁰⁾」、あんなに父上の亡骸に寄り添っていたのに……

そこへホレーシオが、先王の亡霊を見たお知らせに来る。

1幕3場はポローニウス邸。レアティーズが妹のオフィーリアに、ハムレットがたとえ愛していると言ってきても、おまえとは身分違い、くれぐれも自重しろと語っている。と、父のポローニウスがやって来て、レアティーズに留学先における訓戒をたれる。思ったことを軽々に口に出すな、付き合いは親しんで狎れず、喧嘩はいかん、だがやるなら相手に一目置かせるまでやれ、皆の意見をよく聞き、自分の判断は聞かせるな、金の貸し借りはやめろ……へへエ、どれもこれもごもつとも。しかし息子も父も、人には正論をぶつが、自分は、と言えなくもない。ポローニアスの一家、ハムレット家の寒々とした親子関係とは対照的に、ユーモラスで暖かみのある一場を演じる。

観客がちょっとリラックスしたところで、ふたたび夜の胸壁。ハムレットがホレーシオらとともに亡霊に会う。亡霊曰く、私は庭園で昼寝をしていた時に、おまえの叔父に毒を耳に注ぎ込まれたのだ、息子よ、クローディアスに復讐してくれ。ガーン。王子は、「この天と地との間には、ホレーシオ、哲学などでは夢想できぬことがあるものだ」、「この世の関節がはずれている。なんの因果か、それを直すべく生を享けてしまった¹¹⁾」と名ゼリフを吐いて、1幕が終わる。

第2幕に入る。ポローニウスがパリのレアティーズに金と手紙を届けるべく使いを送る。1幕からしばらくの月日がたったことを観客に知らしめる短いやりとりである。使者と入れ替わりにオフィーリアが登場し、ハムレットの様子

10) Frailty, thy name is woman! (I. ii. 146)。『ハムレット』にはことわざになるほど有名な文言が無数にある。さるお婆さんが、『ハムレット』の舞台を初めて見て、感想を求められ、「ええ、面白かったわよ。それにしてもシェイクスピアって人は、たかさんのことわざをつなげるのがなんて上手なんでしょう」と言ったとか。

11) There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy. (I. v. 166-167), また、The time is out of joint: O cursed spite, / That ever I was born to set it right! (I. v. 189-190)

が変だ、気が狂ったのではないかと父親に伝える。

続く2幕2場は長いシーンである。新国王のもとに、ハムレットの幼なじみのローゼンクランツとギルデンスターンが呼ばれてくる。二人はクローディアスから、ハムレットの心のうちを探ってほしいと頼まれる。

また、隣国ノルウェーの老王からの伝言が報告される——甥のフォーティンブラスが兵を集めているのは知らなかった、デンマークを攻めるようなことはさせぬ、ただし甥がポーランドを攻略するためにデンマーク領内を通過する許可をいただきたい、と。はて？ フォーティンブラスについては、何度も、そして常に舌足らずに語られる。この芝居の謎のひとつである。

政治向きの話が終わると、待ってました、ポローニウスがハムレット様のご乱心は、うちの娘オフィーリアに恋焦がれたためだと話しはじめる。ベラベラしゃべる。決めゼリフは「簡潔さこそは知恵の真髄¹²⁾」。平凡な一句、しかしそれを発する資格のない御仁が口にする、観客の笑いを誘える。おまえに言われたくないわ！

そこに当の王子が、本を読みながら登場する。おしゃべり大臣が、何を読んでいるのかと聞くと、「ことば、ことば、ことば」。これも平凡にして、後世に残る名ゼリフ。「シェイクスピア劇は見るものじゃない、セリフを聴くものだよ」云々と、文脈から独立してしばしば引用される。

ポローニウスが煙に巻かれた後、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに探りを入れるが、のらりくらりとやり過ごされる。いや、ハムレットは、二人が国王と王妃に何を命じられたのか、彼らの思惑を見透かしている。

亡霊の言を確かめるべく狂気をよそおうハムレット。一方、新王クローディアス、喪服をサッと着替えて彼と再婚した母ガートルード、さらに提灯持ちのポローニウスらは王子の真意をはかろうとスパイを放つ。そう、この芝居、国王になれなかったハムレットがひとり、叔父による新政権の腐敗に気づいて思い悩む物語である。周囲は皆、すばやく新体制になびく。官軍への雪崩現象は、

12) brevity is the soul of wit (II. ii. 90) 肝に銘じたい。学校の先生も、職業病で、話が長いんだよな。

世の常。古今東西、スレた大人たちの行動は変わらない。

例えば現代なら、まだ世襲制が残っている企業で、社長が死んだ。次期社長の座は当然、長男にまわってくると思いきや、副社長が他界した社長の未亡人と結婚して、トップに座った。なにか上の方がきな臭いぞ。しかし社員たちは、何事もなかったかのように新社長の側にシフトする。俺たちには守るべき妻子がいるんだ、上層部の権力闘争になんか巻き込まれてたまるか¹³⁾。

そんな中でひとりだけ、「おかしい」と声をあげた青臭い若者がいた。ほかならぬ御曹司である。新社長は、俺の後を継ぐのはおまえだと約束してくれた、もう少し待っていれば、トップの座は自然に手に入るのに。

孤立無援のハムレット。常識ある大人の対応ができない。この世の関節がはずれていることに我慢がならない純粋な、もとい頑^{かたく}々な王子。そこで、体制に与^{くみ}しないハムレットと新体制の安定を図るクローディアスとの間に壮絶なスパイ合戦、情報合戦が展開される¹⁴⁾。

と、旅回りの一座がエルシノアにやって来る。芝居好きのハムレットは大喜び。さっそく役者たちに古代ギリシャの英雄劇のセリフを語らせ、明日の晩、『ゴンザーゴ殺し』をやってくれ、ついでに少しセリフを追加してほしい、と。

このエピソード、座長役は各劇団の長老格の俳優が演じる。古臭い大昔の芝居の一節を悠々と朗じると、主人公のハムレットをさえ食ってしまう、そんな演技力抜群の老優が扮する役柄。僕はいつも王子役以上に、今回は誰が座長を

13) マイケル・アルメレイダ監督の『ハムレット』(2000年、アメリカ映画)は、現代ニューヨークの大企業を舞台に、イーサン・ホーク扮する映画監督志望の若者ハムレットが、死んだ社長の弟クローディアスと母ガートルードの不正に挑む。笑いながら見る悲劇。

14) ニコラス・ハイトナー演出の現代版『ハムレット』(ナショナル・シアター、2010年)では、耳にイヤホンをしたスーツ姿の警護官がハムレット(ロリー・キニア)らの背後にスッと立っている。ハイトナー曰く、エリザベス朝は警察国家だった、エリザベス女王の重臣フランシス・ウォルシンガムが膨大な予算を使って、スパイ活動をやらせていた。それを現代に置き換えると、常時SPに囲まれ、監視され、盗聴もされている状況が浮かび上がる(NTライブ上映時、ハイトナー自らの解説より)。ハイトナーの沙翁演出は、取ってつけた現代化にあらず。常に「戯曲の本質」に忠実で、唸らされる。僕が今日までに見た中で3本の指に入る絶品の『ハムレット』だった。

演じるのだろうと楽しみにしている¹⁵⁾。

第2幕のラストはハムレットの長い独白である——俺はなんという意気地な
しだ、役者たちはたかが作り話にかりそめの情熱をかき立て、魂を打ち込んで
いるのに……自らの優柔不断を嘆くハムレット。いや、まだ証拠が不十分だ、
そうだ、クローディアスに芝居を見せて、彼の本心を探り当てよう¹⁶⁾。

3幕に入る前に、ひとつ“外堀”の話をしておきたい。僕はハムレットの悩み
の第一は、国王になれなかったこと、よって『ハムレット』は王位継承をめぐ
るミステリー劇だと考えている。それを語るには、テューダー朝の時代状況に
触れる必要がありそうだ¹⁷⁾。

15) 前出のケネス・ブラナー版『ハムレット』。アメリカ人に見せるために作った通俗
的な沙翁映画だ。いったいハリウッド映画では、ヒーロー、ヒロインはハリウッド
の銀幕のスターが格好よく演じ、脇役や悪役はロンドンの舞台俳優が目立たぬよう
に、淡く演じるのが、通常のパターンだ。ところが、ブラナーはそれをひっくり返
し、主役級はイギリスの舞台役者、そして脇の演技力が必要な役柄をスクリーンで
おなじみのアメリカ人たちに振った。その最たるものが、座長役のチャールトン・
ヘストンである。ハリウッドのアクションスターとして一時代を築いた男。古代ロー
マ史劇『ベン・ハー』(1959年)の戦車シーン、よかったなあ。しかしこの肉体派の
俳優はシェイクスピア劇が大好き、とくにアントニーにご執心で、映画『アントニー
とクレオパトラ』(1971年)は、監督・脚本・主演を一人でこなした。出来はノーコ
メント!

で、ブラナーは、ヘストンに役者冥利の座長役を依頼した。もちろん彼は快諾。そ
して古典劇で鍛えたイギリスの舞台俳優が大勢いる中で、格好をつけて気持ちよさ
そうに演じた。さすが勇氣あるアメリカのアクションスターは違う。チャールトン・
ヘストンの演技を見て、「下手くそ〜、やめちまえ〜、大根〜」と叫べなかったら、
あなたはシェイクスピア劇よりアメリカ映画を愛する人なのでしょう。

16) 僕は、グリゴリー・コージンツェフ監督の『ハムレット』(1964年、旧ソ連映
画)で、二幕の幕切れにあるこの第二独白のすぐ後に第三独白を続けたシーケン
スが好きだ。ハムレットを演じたインノケンチー・スモクトゥノフスキーが旅役者
の朗唱を聞いてしだいに感情を高ぶらせる様子を、彼が叩く太鼓の音で表現し、つ
いに王子が叫び声をあげると、海岸に打ち寄せる波がそれに呼応、そして「生くべ
きか、死すべきか」と。ハラショ! ビーター・ブルックは黒澤明版『マクベス』た
る『蜘蛛巣城』(1957年)とともに、コージンツェフのロシア語の『ハムレット』を、
世界最高のシェイクスピア映画と評価している。

17) この項は、拙稿「シェイクスピア劇にみる「近世」」(『世界史のなかの近世』慶應
大学出版会、2017年所収)の一部をほぼ再録した。同稿では、沙翁劇が生まれた
「近世」がいかなる時代であったかをさまざまな角度から考察している。ご参照。

我々現代人は、王位継承がいかに近世国家の命運を大きく左右したかという問題に鈍感である。そもそも近世の君主国 (monarchy) とフランス革命以後の国民国家 (nation) との間には、決定的な違いがある。同じ国家といっても、前者は国王ないしは王家の持ちもの、対して国王の首をはね、民衆に主権ありとした国民国家は、あくまでも全住民が国を担う存在であることを根本理念としている。

そうした差異ゆえに、革命以前のヨーロッパでしばしば起こった王位継承戦争が、いやその前に、国境の変更が戦争よりもむしろ王侯貴族の結婚によってなされた事実が、今日の我々にはなかなか実感を込めて理解できない。そんな場合、王家の家系図を傍らに置くと、近世国家のカラクリがわかってくる。

シェイクスピア劇でも、国王を国王たらしめる王家の血筋の説明があちこちに散見される。『ヘンリー五世』の開幕早々、国王はカンタベリー大司教から、女子の相続権を否定するサリカ法¹⁸⁾について延々と講釈を聞き、その法律がなんらヘンリー王のフランス王位を要求する権利の妨げにならないことを確認したうえで、フランスへ軍を進める。

女性の王位継承権——イングランドにサリカ法は存在しなかったが、中世以前で唯一人の女王マティルダが異常な性格だったこともあり、また女性の統治者は結婚相手を選ぶのが難しいため、女性の君主は好ましくないとされていた¹⁹⁾。ヘンリー八世が王子欲しさに6人の妻を娶^{めと}り、うち2人と離婚し、2人を処刑したのはご存じのとおり。

だが、ヘンリー八世の唯一の嫡男エドワード六世は15歳で早世し、王位にはエドワードの姉、身分は庶子だったメアリーが就く。そのメアリー一世は

18) かつてフランク部族のサリカ支族の間では女子の相続権を認めず、それがフランス王国などで拡大解釈され、女性による王位継承を否定していた。劇中、カンタベリー大司教はサリカ法がフランス王国の法律ではなく、よってヘンリー五世が女系によるフランス王位継承権を要求することは正当であると論じている。

19) J. E. ニール『エリザベス女王』大野真弓・大野美樹訳、みすず書房、1975年(原著1934年)、p. 1。古い本だが、ホイッグ史観を代表する歴史学者がものしたエリザベス一世の伝記で、複雑なテューダー朝の政治状況を理解するために、僕が繰り返し読んでいく物語的な歴史の傑作である。お勧め。

カトリックを信仰し、プロテスタントの指導者を300人近く火刑に処して、血に飢えたメアリーと呼ばれたのも悪名高き話。イングランドにとって不幸中の幸いだったのは、5年間で彼女の治世が終わったことであった。

そして、次王がプロテスタントのエリザベス一世。彼女もまた処刑されたアン・ブーリンの娘として非嫡出の身であり、厳密に言えば、ヘンリー七世の曾孫で隣国スコットランドにいたメアリー・ステュアートの方が有力な王位継承権者だったという²⁰⁾。このカトリック教徒のメアリーこそエリザベスの天敵、30年近くにわたって女王の喉元の棘であり続けたスコットランド女王であった。

と、テューダー朝の国王5人のうち、長男が父王を継いだのはエドワード六世のみ、王位継承は先王が崩御するたびに迷走して国家の命運を脅かした。王位継承権や王家の家系図が人々の関心と呼ばないはずはなかった。

シェイクスピアがまず筆を起こしたのは悲劇ではなく、15世紀のイングランド史劇だった。王権を争奪する凄惨な内乱、バラ戦争(1455-85年)を題材にして沙翁が『ヘンリー六世』3部作を書いた1590年代初頭、エリザベス女王(1533-1603年)は60歳になろうとしていた。織田信長が「人生50年」と謡った安土桃山時代の還暦である。しかも“処女王”には嫡子どころか兄弟姉妹もいなかった。誰が次の国王になるのか？

当時の王侯貴族から庶民にいたるまで、王位継承権をめぐる話題には並々ならぬ興味を抱いていた。シェイクスピアはそこに目をつけ、王冠を奪い合う内乱の空しさを綴って、人気劇作家への道を切り開いた。また、今日我々の知る台本に近い形で『ハムレット』が初演されてから3年ほど後にエリザベス女王が崩御。王位は^{くだん}件のメアリー・ステュアートの長男、スコットランド国王ジェームズ六世、イングランド国王としてはジェームズ一世に渡り、1603年ステュアート王朝が始まる。

そんなエリザベス朝末期の時代状況の中で、グローブ座の観客が『ハムレット』をどう見たか。先代のデンマーク王ハムレットが他界し、未亡人となった

20) 同書, p. 53。

ガートルードが、先王の弟クローディアスと再婚、クローディアスは兄の王位を引き継いだと宣言する——おかしいではないか。長子相続なら、父と同じ名の王子ハムレットが王位に就くはずなのに²¹⁾。と、いかがであろう、人々は『ハムレット』を不可解な王位継承から始まるミステリー劇として享受したのではないか。

もうひとつ。テューダー朝の開祖ヘンリー七世は、そもそもジェントルマンの身分に過ぎなかった。ところがバラ戦争の過程で、ランカスター家の貴族たちが皆、戦死ないしは殺されてしまったため、急きょランカスター家傍系にあたるテューダー家のヘンリーが貴族に叙せられ、リチャード三世への反乱軍の総帥に祭り上げられた。彼はリチャード三世を討ち果たし、王位を奪取すると、翌年ヨーク家のエリザベス——リチャード三世の兄で先王だったエドワード四世の娘——と結婚し、これによりプランタジネット王朝から分かれたランカスター家とヨーク家が、テューダー家のヘンリー七世によって統合され、イングランドの王家はふたたびプランタジネット王朝に接合されたと印象づけようとした。

『ハムレット』初演時の観客は、デンマークの王位が女系の血筋を通じて継承されていた、ハムレットやクローディアスではなく、ガートルードに王位継承権があり、それゆえ彼女と結婚したクローディアスが国王になれたというフィクションをテューダー王朝成立の経緯と重ねて楽しんでいたかもしれない。だが、さらに事を突き詰めれば、ヘンリー七世の王妃となったエリザベスはたしかに女性としてはヨーク家の第一位相続権者であったが、男子の継承権が優先するという当時の一般通念からすれば、エリザベスより王位に近い人間はまだ何人も生存した。そしてヘンリー七世は、その治世の最後まで彼らの反乱に苦

21) 中世のデンマークは選定君主制だったという説もある。だが、シェイクスピアは外国を舞台にしても、当時のイングランド人の心性に則って芝居を書いた人である。僕は沙翁も観客もやはり世襲制、とくに長子相続を念頭に『ハムレット』を書き、見たと考えている。河合祥一郎『謎解き『ハムレット』——名作のあかし』三陸書房、2000年、p. 64 参照。

しめられたのである²²⁾。

『ハムレット』はやはり、次王が誰になるか判然とせぬエリザベス一世晩年に書かれた、王位継承権をめぐる一大推理劇だったのではないだろうか²³⁾。

第3幕。クローディアスとポローニアスがオフィーリアに、ハムレットと偶然出会ったふりをして話をし、その様子を自分たちが物陰から窺^{うかが}っているから、と申し渡す。

そこへハムレットが登場し、ハッハッハッ、「生くべきか、死すべきか (To be, or not to be)」。前後の場とほとんど脈絡のない、ポコッと浮いている独り言、しかし観客は「さて、今宵のハムレット役者は第三独白をどういう風にしゃべるか」と、王子が舞台に現れる前から落ち着かなくなる。それって、芝居を鑑賞する態度として、あまり健全なこととは思えないのだが。

で、独白の内容は——復讐を決断できぬ自らにそろそろハムレットがイラついてきて、いっそ死のうか、と。その含意を汲み取れば「生くべきか、死すべきか」、また僕の学生時代には、小田島雄志がbe動詞を素直に「このまままでい

22) 拙論「王権を支えた歴史解釈——テューダー朝の正統史観とシェイクスピア史劇」(『王と表象——文学と歴史・日本と西洋——』山川出版社, 2008年, pp. 268-271) 参照。

23) 僕が書けるのはここまでである。僕がデンマーク王家をめぐる王位継承のカラクリに興味をもった発端は、田中重弘『「ハムレット」の謎』(講談社, 1981年), 『シェイクスピアは推理作家』(文藝春秋, 1982年), 『シェイクスピアは欺しの天才』(文藝春秋, 1985年)であった。田中氏は、長くせに舌足らず、いや意図的に書き落としているとしか思えない、隠していることが多すぎる『ハムレット』の王位継承にまつわる疑問をひとつひとつ書き出し、それらについて果敢に推理をめぐらしている。『ハムレット』の2種類の四折版テキスト、13世紀デンマークの歴史家サクソ・グラマトイクスによる年代記、さらにドイツ語で残る、おそらくはトマス・キッド作であろう『ハムレット』(『兄弟殺し報復の顛末』)までも渉猟して、シェイクスピア劇の成立過程と作者の意図について大胆な仮説を呈示する。その結果、ハムレットはクローディアスとガートルードの間の息子、オフィーリアは先代ハムレット王の隠し子、フォーティンブラスはハムレットと異母兄弟、オフィーリアはハムレットとの子をお腹に宿していた、などなど。

学界ではほとんど無視された、しかし僕がこれまでに読んだシェイクスピア劇の攻略本で最も気になっている、でも最も行けない書物が、田中氏の労作である。30年以上、僕の仕事部屋の本棚のいちばん目につく場所に所蔵してある。敬意を込めてここに紹介するしだいである。

いのか、いけないのか」と直訳して評判になった²⁴⁾。

なぜハムレットは復讐を躊躇するの^{ちゅうちよ}か、その逡巡^{しゅんじゆん}の長さ、そして沙翁の説明不足が、後世の解釈合戦を生み出した。前述したように、シェイクスピアは中世のイングランドを描く歴史劇から戯曲に手を染めた。そこでは6人の国王——多くはダメ君主——について熟慮し、エリザベス朝の厳しい検閲をかいぐりながらけっこう辛辣な批判も加え²⁵⁾、しかし彼らを揶揄^{やゆ}しているうちに王様稼業^{やまがわ}ってのも大変な仕事だなあと、つくづく同情してしまった節がある。それが「空ろな王冠 (the hollow crown)²⁶⁾」なるモチーフ。

王位継承権を争う中世史劇の枠構造とモチーフは、後年の悲劇にも引き継がれる。ただし、シェイクスピアの興味はしだいに王侯貴族たちの深い心の闇を追究する方向に向かったようだ。すなわち、それまでは「外側から」政治史を記述していた沙翁が、王族たちの葛藤を「内側から」語りはじめる。

そうした内面心理を描出する手段として使ったのが「独白」である。それはハムレットがつぶやいたのが最初ではない。沙翁史劇の諸王たちも口にしたが、『ジュリアス・シーザー』で愛するシーザーを殺害するかしないか迷うブルータスの心の揺れを活写するあたりから、自らのテクニクとして意識的に使いだした。そして、『ハムレット』になると、胸いっぱい、独白いっぱい²⁷⁾。

ひとくさり名調子のブツブツを聞いたところで、オフィーリアが祈禱書を読

24) 第三独白の邦訳に関心のある方は、河合祥一郎訳の『新訳 ハムレット』(角川文庫、2003年)の巻末に、明治以来の43種類の翻訳が掲げている。ご覧あれ。

25) テューダー絶対王政期、同時代の「政」を取り上げるとはご法度だった。そこでシェイクスピアは前世紀の史劇に事寄せて、エリザベス治世の“現代”に対する批判や皮肉をずいぶん挿入している。また、彼の時代の劇作家の大半が検閲に引っかかって監獄入りを経験しているのに、沙翁だけは臭い飯を食った記録が見当たらない。どうやら隠しながら書く天才だったらしいのだ。研究者による行間の裏読みが盛んなゆえんである。

26) 『リチャード二世』3幕2場160行の名ゼリフより。

27) 小田島雄志は、『ジュリアス・シーザー』におけるブルータスあたりからシェイクスピアは「内的葛藤」を明確に描くようになり、その内面の葛藤が自分でも何なのか見えなくなったのが、ハムレットの「内的カオス」の世界だと、魅力的な解説をしている。小田島雄志『小田島雄志のシェイクスピア遊学』白水Uブックス、1991年、p. 150。

みながら姿を見せる。「美しきオフィーリアよ」, 「あら, 殿下, いかがお過ごしで」, 「元気, 元気, 元気」。私, ハムレット様にいただいた贈り物をお返しいたします。と, ここでハムレットの調子が変わる。「おまえは貞淑か?」, 「おまえは美しいか?」, さらに「かつてはおまえを愛していた」と言い, すぐに「愛していなかった」と否定する。そして, 「尼寺へ行け」。世に「尼寺の場」と呼ばれる名シーンである。

ハムレットが急に激したのは, なぜか。多くの舞台では, 様子を窺うクロウディアスとポローニウスに, ハムレットが気づいたことにしている²⁸⁾。それが劇場で見ていると, いちばん自然な流れだ。愛するオフィーリアまで体制側の手先になっていたとは。王子の孤立感はひとしお。尼寺は当時, 女郎屋の隠語でもあったという。

おっと, ハムレットはそもそもオフィーリアを愛していたのか。小田島雄志は「愛していた説」が7対3ないしは8対2の割合で有力だと述べて, 「愛していなかった説」のドーヴァー・ウィルスンに噛みついて²⁹⁾。これも議論百出³⁰⁾。

28) 前述したニコラス・ハイトナー版では, 祈禱書に仕掛けてあった盗聴器をハムレットが見つけて激怒する。また, BBCのテレビ版『ハムレット』(1980年)では, オフィーリアの持っていた祈禱書が逆様, それをデレク・ジャコビ扮するハムレットがひっくり返す演出だった。おなじみの場面でも, テキストの舌足らずな部分を, 各公演がいかなる小道具やアクションで補っているか。だからファンはよく知っているはずの沙翁劇を繰り返し見に行くのである。

29) 前掲の『小田島雄志のシェイクスピア遊学』, p. 11。

30) えっ, 僕ですか。まあ, 憎からず思っていたオフィーリアまで敵方だと知って, ハムレットはどんどん孤立無援の状況に押しやられていくのだらうな, と。もともと, 愛情の問題と二人の肉体関係の有無はまた別の話とも思える。僕の好きな映画にトニー・リチャードソンが監督した『ハムレット』(1969年)があるが, オフィーリアは白塗りの厚化粧に胸の開いた服, 初登場のシーンでは兄レアティーズと恋人同士のようにキスして, 近親相姦的な香りを漂わす。とても清純そうには見えない妖艶な女性。ハムレットとはプラトニック・ラブ?! そんなはずはないだろう。すべての既成概念に反発した「過激な1960年代」を体現する作品。

僕は, ジョン・オズボーンの『怒りを込めて振り返れ』(1956年)を演出したトニー・リチャードソンから, 『ハムレット』は恋愛劇にあらず, 基調は非情な政治劇, だから男女関係をあまりきれいに考えすぎても面白くないと, 教えてもらった。拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』第1章第4節「過激な60年代——トニー・リチャードソンの『ハムレット』」をご笑覧。

3幕2場は劇中劇のシーンである。城内の広間でハムレットが役者たちにアドバイスしている。セリフはさりげなく、大仰な仕草はやめろ、芝居は「自然に鏡をかかげるもの (the mirror up to nature)」だ——それはシェイクスピアの演技に対する基本姿勢であっただろうということで、しばしば引用される一句。そう、けれんみがあってはダメだ、と。

劇中劇はいろいろと遊びができる。見世物的な要素を挿入でき、観客に一息つかせる場でもある。ハムレットはその古めかしい芝居の中に、国王が毒殺されるシーンを挟み、クローディアスの顔色^{のぞ}を覗こうとする。題して「ネズミ取り」^{マウストラップ}、沙翁好きのアガサ・クリスティが同名の推理劇を書き、ロンドンではエリザベス二世が即位した1952年から半世紀をはるかに超えるロングランを続ける名物芝居になっている³¹⁾。

で、クローディアスは、途中でいたたまれなくなって、席を立つ。その芝居やめい、見たかホレーシオ、はい、しかと、間違いない。

ハムレットはガートルードに呼ばれて、彼女の部屋へ。すると、おっ、クローディアスがひとり祈っている姿が見える。舞台だと、城内の礼拝堂、十字架に向かって、ってところだ。シェイクスピアは悪役にも魅力的な独白を語らせる。僕はこのクローディアスの一心につぶやくモノローグが好きだ。アダムとイヴの息子カインが弟アベルを殺害した人類最初の罪悪³²⁾を自分も犯してしまったと、兄殺しを告白し——ここで亡霊のことばどおり、先代ハムレット王が弟によって亡き者にされたのが事実だと判明する³³⁾——天に許しを乞う。

ハムレットが背後から義父に近づく。今なら殺れる。いや、待て、祈りの最中に殺しても、あいつは天国へ行ってしまふ、それでは復讐にならない。ここでも逡巡するハムレット！ 長いクローディアスの懺悔^{ざんげ}が終わる。そして最後

31) 舞台の出来は、ノーコメント。観光客相手の、安心して見られるエンタメ芝居である。だが、英語はさほど難しくない。僕は大学1年生用の英語読解の授業で、ずいぶんこの戯曲をテキストに使った。

32) 旧約聖書「創世記」第4章より。シェイクスピアには聖書からの引用はふんだんにある。

33) 内面を吐露するこうした独白では、登場人物は嘘をつかないというのが、不文律である。

に、「ことばは天をめざすが、心は地にあるまま。心のもとなわかないことばが天に届くはずがない」。これがいいんだ。自分では必死に悔い改めようとしているのに、どうしても心底からの悔恨にならない。ベラベラと後悔のことばは並べているが、それが口先だけだと本人も十分自覚している。よくある話ではないか。僕は王子の“正調”の独白よりも、悪党役のベテラン俳優が朗じる、自分に対する恨み節に心惹かれる。

ハムレットは父の敵^{かたき}をやり過ごし、ガートルードの居間へ行く。そこにはポローニウスが先まわりして、壁掛けの陰に身を隠している。息子は母親をなじり、彼女の悲鳴にポローニウスが声をあげ、ハムレットが壁掛けごしに彼を刺し殺す。ネズミか、王か、なんだ、出しゃばりな道化ではないか。

だが、ポローニウスという男、単なる天然のおどけ者ではない。モデルはエリザベス一世に40年間仕えて、ハムレット初演の数年前に他界した重臣ウィリアム・セシル³⁴⁾ともいわれる。女王は旧来の封建貴族と新興の市民階級を巧みに登用して競わせた。セシルは後者。もしエリザベス朝の観客がポローニウスにセシルの影を見ていたとすれば、彼は君主と一蓮托生の側近、またハムレットとオフィーリアは身分違いで、結ばれるべくもなかったと想像するだろう。

ハムレットは、父王とは似ても似つかぬクローディアスと再婚した母親を責める。いい年をして、爛れた情欲^{ただ}が燃え盛ったのか。すると父親の亡霊が現れて、早く復讐せよ、だが母親の鬨う魂には手を貸してやれと言うのが、おかしい。ガートルードには亡霊の姿は見えない。おまえ、宙を見つめて、どうしたの？

この場面の母子をいかに演出するか。フロイト流に言えば、ハムレットはオ

34) ウィリアム・セシル(1520-98年)、後に爵位を授かり初代バーリー男爵。ジェントリー階級の出身で、多事多難だったエリザベスの治世にあって、秘書長官、大蔵卿などを歴任、移り気ではしばしば感情に走る女王を我慢強く支えた。国教会の確立、スコットランド女王メアリーの処置、アルマダの海戦の勝利などに貢献、エリザベスが中道政策を維持できたのも、セシルの献身あってこそだった。しかし、功罪相半ばというか、もしポローニウスがセシルを念頭に書かれたとすれば、シェイクスピアは長年の権力者をあまりよく思っていなかったのであろう。

イディプス（エディプス）・コンプレックス、つまりはマザコンの気があり、こ
こは近親相姦に近い激しい“バトル”を展開させるのが、現代の舞台の流行で
ある³⁵⁾。

『ハムレット』は、王子とオフィーリアの恋愛よりも、ガートルードとの親子
関係の方に重心がありそうだ。むしろそこには王位継承の問題もからんでいる。

シェイクスピアの神格化という罪作りな所業を始めたのは、19世紀初頭のロ
マン派である。ワーズワースと並ぶイギリス浪漫派の総帥コールリッジはハム
レットを「悩める知識人」と論じた。

ドイツもロマン主義では負けていない。18世紀は政治的、軍事的、また文化
的にもフランスがヨーロッパを席卷した時代、その断トツの先進国フランスに
コンプレックスを抱いた片田舎ドイツの知識人たちは、「おっ、イギリスにシェ
イクスピアという型破りな作家がいるではないか」と沙翁を発見して持ち上げ
た。古典的でピシッとした形式を重んじるフランス演劇とは異質な、野性味あ
ふれるシェイクスピア！ その礼賛者の筆頭がゲーテである³⁶⁾。

さらにロシア。ハムレット関連でいえば、ツルゲーネフは猪突猛進のドン・
キホーテと対比してデンマーク王子の優柔不断さを強調した。これはわかりや

35) ローレンス・オリヴィエが監督・主演して『ハムレット』（1948年、イギリス映
画）を撮った際に、フロイトの弟子にあたる精神分析医アーネスト・ジョーンズの
アドバイスを受けたのは、世に知られた話である。オリヴィエはこの3幕4場で、
自分より13歳も若い女優アイリーン・ハーリー扮するガートルードに激しい嫉妬心
を抱く演技をした。また、フランコ・ゼフィレリ監督の『ハムレット』（1990年、
アメリカ映画）では、メル・ギブソンがグレン・クロウズに馬乗りになってバトル
する、これはもう近親相姦そのものの“ラブシーン”であった。もっとも、今から見
れば暗示にとどめているオリヴィエ版の方が、明示的なアメリカ映画の官能シーン
より淫靡で、いやらしくて、そそられる。すべからく見せればいいもののじゃあ
ないのが、芸術の面白いところだ。

36) 晩年のゲーテと交流して彼の自由な談話を筆記したエッカーマンの『ゲーテとの
対話』（上・中・下、山下肇訳、岩波文庫、1968-69年（原著1836年・48年））を読
まれたし。ゲーテもシェイクスピアにゾッコンだったことがよくわかる。僕の長年
の愛読書。なお、僕が最も“大文学”の名にふさわしいと思っているのは、シェイク
スピア劇でもドストエフスキーの小説でもなく、ゲーテの『ファウスト』。そこには
ヨーロッパ近世がスッポリと収まる！

すく、かつ強烈、後世のハムレット・イメージに多大なる影響を及ぼした³⁷⁾。

シェイクスピアの、また『ハムレット』の学説史を紹介しはじめると收拾がつかなくなる³⁸⁾ので、ここまでにしておくが、ロマン派の沙翁礼賛を起点とする19世紀批評のひとつの大きな特徴は、登場人物たちの“性格”をさかんに論じた点にある³⁹⁾。さながら実在の人物のように分析する。その名残りといおうか、今日でもシェイクスピア劇の概説書には、しばしば「運命悲劇」と「性格悲劇」なることばが出てくる。

曰く、シェイクスピアが30歳前に書いたであろう『ロミオとジュリエット』は「運命悲劇」と呼べよう。プロローグで「不幸な星の恋人たち」と謳われ、ティボルトを刺殺してしまったロミオは、「俺は運命の慰みものだ」と嘆く。若い恋人たちを破滅へと向かわせるのは、二人の外側に位置する大人たちの絶大なる権力であり、それは運命とも言い換えられる。ロミオとジュリエットにはほとんど^{とが}咎がない。だから、観客はさめざめと泣ける。だが、シェイクスピア

37) ツルゲーネフ『ハムレットとドン キホーテ、他二篇』（河野與一・柴田治三郎訳、岩波文庫、1955年）参照。

38) 本節の冒頭にも記したとおり、シェイクスピアの攻略本はおおよそ腹立たしいほどたくさんある。それらと格闘を始めると、せっかくの沙翁の芝居がつまらなくなる。そこで、攻略本の攻略本が出版されているから、ご紹介しておきたい。沙翁の同時代から19世紀までのシェイクスピア批評を概観したければ、川地美子（編訳）『古典的シェイクスピア論叢——ベン・ジョンソンからカーライルまで』（みすず書房、1994年）あたりから。時間がなければ、同書のあとがきだけでも勉強になる。1冊読むのは嫌だという方には、高田康成・河合祥一郎・野田学（編）『シェイクスピアへの架け橋』（東京大学出版会、1998年）所収の「シェイクスピア批評今昔物語」（河合祥一郎）、15ページで20世紀末までの批評史を理解した気にさせてくれる優れたものの記事である。同じく河合祥一郎の、（注21）でも触れた『謎解き『ハムレット』——名作のあかし』はロマン派を仮想敵とした本、その第2章を読むとロマン主義解釈の功罪がわかる。さらに、レポートのメ切りが目前、それでも長いという人は、小田島雄志訳の『ハムレット』（白水Uブックス、1983年）の巻末にある村上淑郎の解説かな。これだけとはいう重要な論点がコンパクトにまとめられている。

はい。以上のどれかをザッと読んだら、一度全部忘れて、『ハムレット』のテキストと向き合うのがよいでしょう。

39) 20世紀初頭に出版されたA. C. ブラッドレー『シェイクスピアの悲劇』（1904年）は、19世紀の性格批評の頂点をなし、同時に20世紀の沙翁批評はアンチ・ブラッドレーからスタートしたといわれる名著である。有難いことに、中西信太郎による邦訳が岩波文庫（上・下、1938-39年）に入っている。これは一度読んでおくべき攻略本。

の人間観察が深まってから綴られた「四大悲劇」では、悲劇の原因は主人公自身の深き心の闇に求められる。それが「性格悲劇」だ、と。

歴史劇だけでなく、悲劇もまた初期の作品から円熟してくると、外から内へ、戦うべき敵が自分自身の内側にいる芝居になっていく。深く思索する王子ハムレットってか。

と、おまえはどう考えるかって。そうですね。内面劇といっても、性格に特化してしまうと、生まれつきの性質を“^{ステティック}静的”に捉える方向に行きすぎるかもしれない。僕はむしろ人間関係性の中でハムレットの内面を見つめたい。周囲から隔絶して、孤立無援に陥った王子。それだけで十分悲劇のヒーローたり得ると思うのだが……

でもその前に、もう少し物語をたどっておきたい。舞台は第4幕。国王は王妃ガートルードから、ハムレットがポローニヤスを殺害し、遺体を持ち去ったと報告を受ける。のらりくらりと言い逃れる王子から、やっと死体の隠し場所を聞きだし、ハムレットにイングランド行きを命じる。従者はローゼンクランツとギルデンスターン、二人に持たせたイングランド国王への親書には、王子が到着しだい殺せ、と。

4幕4場。デンマークの野をポーランドへ進軍するフォーティンブラスをチラリと登場させる。ふと考えれば、ノルウェーからポーランドなら海路だろうに。この脇役、なにか怪しい。が、彼の大軍に遭遇したハムレットは、また独り言つ——ポーランドのほんの一握りの土地のために、役にも立たぬ名誉のために、2万人の軍隊が死地へ向かう、なのに臆病な俺は復讐すらできずにいる、と。う～ん、何を悩んでいるんだか。やっぱりグズな性格の王子というべきか。これがハムレットの第四独白である。

そのころ、エルシノア城も風雲急を告げていた。父親ポローニヤスの死を不審に思ったレアティーズが暴徒たちとともに乱入してきたのだ。彼もまたフォーティンブラスと並んで直情型、なかなか行動できぬハムレットを際立たせる“劇的機能”を有する。そう、登場人物たちをあまり実在の人間のように分析しすぎて、行き詰まる。お芝居だ、それぞれの劇中における役割というものがある。

父親の復讐を叫ぶレアティーズを、誰が敵^{かたき}か知りたくないかと言ってなだめるクローディアス。そこへ入ってきたのは、あわれ、発狂したオフィーリアである。ここは可憐なるオフィーリアの見せ場。ハムレットに思いを寄せていたのであろう、しかし自らの意思で行動する近代的な女性にあらず。結局はクローディアスとポローニアスに操られ、ハムレットに見透かされて、邪険にされる。そのうえ父親まで殺されて。受身の乙女は、口あんぐりの兄レアティーズの前で、花を配りながら花ことばを語り、夢中で歌を歌う。

ハムレットからクローディアスに、帰国を告げる手紙が届く。なにっ？ 今ごろはイングランドで始末されていると思ったのに。国王はレアティーズに王子と剣術の試合をせよとけしかける。レアティーズも、それなら剣先に毒を塗っておこう。クローディアスは、念のため、毒入りの杯も用意しよう、と。悪い奴らだ。

そこに王妃が登場して、オフィーリアが死んだ、と。ここはガートルードの見せ場、いや聴かせ場。小川のふちの柳の木によじ登り、枝が折れて、すすり泣く流れに落ちた、しばらくは人魚のように川面に浮かび、昔の歌を歌っていたが……ラファエル前派の画家ミレーはこの場面に触発されて「オフィーリア」(1852年)を描いたが、沙翁劇の方は古代ギリシャ劇と同様、出来事の多くは舞台の外で起こり、それを役者が報告するだけ。観客は俳優の朗じる詩行を耳にしなが、想像の世界に遊ぶ。これがシェイクスピア劇の本来の姿だ⁴⁰⁾。

ちなみに、先にも触れた、ハムレットとオフィーリアは心が通じていたか否かの問題。僕の愛するチェーホフの『かもめ』(1895年)は、『ハムレット』を枠構造に使っている⁴¹⁾。劇作家をめざす若者トレーブレフと女優志望のニーナ、また青年の母親アルカージナと年下の愛人で作家のトリゴーリンは、エルシノ

40) 映画は見せてナンボの視覚芸術。オリヴィエは映画『ハムレット』の中で、ミレーのあの写実的な絵を模した絵画的場面を挿入して、賛否両論を呼んだ。聞くか見るか、それが問題だ。

41) チェーホフは『かもめ』のあちこちで“シグナル”を出して、作品が『ハムレット』を下敷きにしていることを示している。2幕でトリゴーリンが「グランド・ピアノのような雲が見える」と言うのは、ハムレットが「あの雲はラクダの形をしている？」とポローニアスをからかう通称「雲の場」(3幕2場)のパロディである。また、『かもめ』1幕の劇中劇は「マウストラップ」が連想される。拙著『現代を知るための文学20』(国書刊行会、2020年出版予定)の第14節を読まれたし。

ア城の王族を横滑りさせた人物たち。で、『かもめ』——いやチェーホフのほとんどの作品——は、人の真意の伝わらなさを大きなモチーフにしている。トレープレフとニーナは相思相愛と思いきや、ニーナはただ舞台に立ちたいだけ、マザコン気味のトレープレフは大女優の母親に認められたいのに、アルカージナは息子と張り合い、むしろトリゴリンに思いを馳せる。そのトリゴリンはニーナにちょっかいを出した末に、清純だった娘を捨てる。すべての人間関係は片思いの連鎖、誰の心と心も通じていない。

それを念頭に置けば、チェーホフはハムレットとオフィーリアを両思いの恋人たちとは考えていなかったはずだ。総じて日本人はウェットで、悲劇のヒーローとヒロインとなると、先験的アフリオリに愛ある交流を想像する傾向があるが、魑魅魍魎ちみもうりょうの跳梁ちょうりょうするデンマークの王宮も、腹に一物の芸術家たちが閑居するロシアの田舎屋敷も、甘っちょろい恋愛劇には似つかわしくない。僕はチェーホフ作品のように、ハムレットとオフィーリアにも常なる“すれ違い”を読み取りたい。

もうひとつ、『かもめ』。チェーホフのいわゆる「四大戯曲」の第一作もとっ散らかった芝居である。ユーモア作家としてすでに人気を博し、しかし人間の魂の深層を凝視する大文学は書けずに腐心していたチェーホフが、この『かもめ』で一度むける。が、一度はむけたが、まだ彼のモチーフは雑然としたまま放り投げられたただけだった。彼の「人生は忍耐の旅」なる世界観は、後続の『ワーニャ伯父さん』、『三人姉妹』、『桜の園』で練りこまれ、円熟した形で表現される。けれども、いちばん人気があるのは、よくわからない青春劇『かもめ』の方。

同じく『ハムレット』も、後世には「四大悲劇」と称された作品群の第一作。要するに実験作なのだ。歴史劇のフレームの中に「空ろな王冠」を突っ込んでみたものの、まとまりなく、どの挿話も舌足らずで、支離滅裂の、さながらバイキング料理——デンマークだからではないだろうが⁴²⁾——のような、なん

42) ヨーロッパは8世紀末からおよそ250年間、北欧のバイキング(海賊)に席卷された。イングランドに侵入したバイキングはデーン人と呼ばれ、とくにカヌート王は11世紀前半、イングランド・デンマーク・ノルウェーの王を兼ねる勢いであった。デンマーク(Denmark)とは“デーン人の領土”という意味。エリザベス朝の人々もハムレットのデンマークに、中世の強国のイメージを重ね合わせていたであろう。

でもござれの代物になってしまった。モチーフだけをいえば、王権を不用意に手放す愚行から起こる悲劇『リア王』、王位を篡奪して悲劇に陥る『マクベス』、さらには英雄將軍ともあろう者が小さな嫉妬心から大きな間違いを犯す『オセロー』と、「深い心の闇」は中世北欧の海賊国家の話よりずっと成熟していて、座りがよく、わかりやすい。

なのに、皆に愛されるのは『ハムレット』なんだよねえ。なんでなんだろう。

最終第5幕は、「墓掘りの場」からである。二人の道化が墓を掘りながら、死因が怪しげでもお偉いさんの娘なら融通が利くんだと話している。キリスト教圏では自殺は天下の大罪、教会墓地に埋葬してもらえない、だが身分が高ければお目こぼしかと皮肉って客席を笑わせる。そう、シリアスな場面ばかりでは観客の緊張感が持たない。時に息抜きの喜劇的な一場が必要だ。演劇ではそれを「コミック・リリーフ (comic relief)」と呼ぶ。この5幕1場は、『マクベス』の、ダンカン王暗殺直後の「門番の場」(2幕3場)と並んで、観客を思いきり笑わせ、息継ぎをさせ、^{リリーフ}安堵させる、模範的な「コミック・リリーフ」として世に知られている。

ハムレットがやって来て、鼻歌まじりに墓を掘っている道化たちに呆れる。墓穴から頭蓋骨が放り出される。あの^{されこうべ}髑髏も、生きているところは歌を歌っただろうに。誰の墓を掘っているんだ？ 昔は女だった奴のでさあ。道化は王子だとは気づかずに、なれなれしい口をきく。

いつから墓掘りをやっているんだ？ 王子ハムレット様が生まれた日から、ほら、狂ってイングランドへ送られたあの王子様。あっしはガキの時分からもう30年、墓を掘っている。と、ここでハムレットの年齢が30歳だと判明する⁴³⁾。

43) ハムレット30歳説は、この詩行の10数行後に、王子がおぶってもらったヨリックが23年間地中にあったと記されており、また劇中劇の国王のセリフ(3幕2場)も考慮して、ほぼ定説となっている。しかし、第1四折版にはヨリックの髑髏が埋まっていたのは12年間とあり、それだとハムレットは20歳前くらいに若返り、王子のイメージ、さらには作品のテーマも、根底から見直しを迫られかねない。へへ、本気でテキストと対峙すると、それはまさに本格ミステリー、研究者の苦悩はハムレットの悩みよりも深い？!

であれば、『ハムレット』を青春悲劇とするには、ちょっと年をとり過ぎている。やっぱりハムレットの悩みは王位継承問題にありと考えた方が違和感がない。

そら、また頭蓋骨が出てきた、誰のだ、ヨリックって王様の道化、とんでもない野郎のさあ。へへエ、エリザベス女王の宮廷にも道化がいた⁴⁴⁾。ハムレットは子供のころ、そんな王宮に実在した道化によくおんぶしてもらったとなつかしがつている。

そこに葬列が近づいてくる。国王、王妃、それにレアティーズもいる。なんと今掘られている墓穴はオフィーリアのためのものだった。妹の墓に飛び込んで嘆くレアティーズ。ハムレットもたまたま飛び出して、おい、見苦しいぞと、一喝する。「俺はオフィーリアを愛していた。実の兄が何万人束になっても負けないほどに。」おゝ、ハムレットはオフィーリアを愛していたんだ。でも、死んでしまうと、皆そう言うんだけど。つかみ合いになったハムレットとレアティーズは、やっとのことで引き離される。

5幕2場。ハムレットがホレーシオに、帰国にいたるまでの経緯を語る。彼は船の中でイングランド国王への親書を発見して偽物とすり替えた、自分の代わりにローゼンクランツとギルデンストーンがかの国で死刑になっているだろう、良心は咎めぬ、大物同士が命がけで斬り結んでいる時に小物がしゃしゃり出てくるのは危険だ、と。

王子は幼なじみの二人につれない。どっちがローゼンクランツでどっちがギルデンストーンかも見分けのつかない脇役たち。ハムレットの冷たいことばを聞くと、ちょっとかわいそうになってくる。そこで英国の劇作家トム・ストッパードは、『ローゼンクランツとギルデンストーンは死んだ』（1966年）なる不条理演劇をものした。エルシノア城の権力闘争を、ある日突然呼び出されて王子をスパイせよと命じられ、はては訳もわからぬうちに異国で処刑される小物たちの目で見直して、1960年代の大ヒット作を生んだ。

44) 近世のヨーロッパの宮廷には、しばしば国王に対しても辛辣な口をきける^{7-ル}愚者がいた。多くは知的ないしは肉体的な障害者だったようで、どうやら“魔除け”のような存在として、君主が傍らに置いていたらしい。シェイクスピアがたびたび劇中に登場される^{スニール}道化は、彼の空想の産物ではない。

『ハムレット』は国王になれず、また関節のはずれた理不尽な世の中に耐えきれなくなった男の孤独な戦いを活写した悲劇である。彼の留学先はヴィッテンベルク⁴⁵⁾、そう、ルターの宗教改革で知られた大学である。今日の日本なら、浮世の争いごとに嫌気がさして、仏門に入るってイメージか。けれども、国王と王妃の懇願、さらに父親の亡霊の出現によって、王子は俗世にとどまることにした。

浪漫派ならずともロマンティックな気分をかき立てられるではないか。矛盾に満ちた現実の中で自らの立ち位置を定められぬハムレット。それはまだ大人社会で清濁併せ呑む術を知らない現代の青年たちの心情にも通じる。王位継承の問題がピンと来ない21世紀にあって、『ハムレット』は自己喪失^{アイデンティティクライシス}に陥った若者の青春悲劇として演出されることも多い⁴⁶⁾。

だが、古典主義を標榜する詩人 T.S. エリオットからすれば、ハムレットには彼の感情に見合う「客観的な相関物件」がない、王子に大きな悩みを抱かせるに足る事実なり状況なりがない、となる⁴⁷⁾。ちなみに、御大は王位継承には触

45) シェイクスピア没後 400 年の記念イヤーたる 2016 年、ストラットフォード・アボン・エイヴォンのロイヤル・シェイクスピア・カンパニー (RSC) が“目玉”にした公演はオール黒人俳優(端役の 2 人だけ白人)の『ハムレット』だった。開幕にアメリカのウィテンバーグ大学 (Wittenberg University, オハイオ州に実在) での卒業式の場面が短く挿入され、そこを卒業したハムレットがアフリカらしき祖国に戻ってみると、クローディアスによる独裁国家になっていたという設定。ハムレットを演じるのは、ガーナ系のパーパ・エスイエイドゥー (Paapa Essiedu), 弱冠 25 歳。シェイクスピアの詩行を朗じるみごとなブリティッシュ・イングリッシュ, という従来の“英国の舞台の英語”からはほど遠く、しかしメチャメチャうまい感情表現で、将来を嘱望されている。演出サイモン・ゴドウィン。21 世紀のシェイクスピア上演は、本家本元がそこまでやる時代になっている。

46) 今が旬の英国俳優ベン・ウィショーは、23 歳の時にトレヴァー・ナン演出の『ハムレット』(2004 年) でタイトル・ロールを演じて大ブレイクした。舞台写真を 1 枚見ただけで、「おっ、『ハムレット』は青春悲劇!」と納得させられる。やっぱりハムレットは若くなくっちゃ?!

47) T. S. エリオット (1888-1965 年)。アメリカ生まれ、後にイギリスに帰化したノーベル文学賞詩人。現代詩の記念碑的作品『荒地』(1922 年) で有名だが、むしろミュージカル『キャッツ』(1981 年初演) の作詞者といった方がおわりの向きも多いだろう。ハムレットなる人物はともかく『ハムレット』という作品は駄作だと言いつつエリオットの「ハムレット」(1919 年) は、大御所の評論だけに、ハムレット(『ハムレット』?) 擁護派が反論する起点として絶好、ボコボコに批判された“サンドバッグ批評”である。吉田健一訳が『エリオット選集』第 2 巻 (彌生書房, 1959 年) に入っている。短いから、なにかの折にご一読を。

れていないが。

で、トム・ストッパード以外にも、常識人にあらざるハムレットとは別の視点で物語を書き直したい衝動に駆られた作家はたくさんいる。わが国でも、志賀直哉の「クローディアスの日記」(1912年)は、ハムレットを嫌ってクローディアスの方がまっとうだ、彼は無罪だと、いかにも実直な志賀らしい主張を展開した短篇小説。また、太宰治の『新ハムレット』(1941年)は、「一つの不幸な家庭」を描いた、「学問的、または政治的な意味は、みじんも無い」、「狭い、心理の実験」と作者が「はしがき」で語っているそのとおりの中篇小説である。僕はこの日本文学のお家芸たる私小説の風をなした古臭い『新ハムレット』によって、シェイクスピアの『ハムレット』が単なる「家庭劇」ではなく、ロイヤル・ファミリーをめぐる政治劇だと痛感させられた。偉大なるかな、反面教師!⁴⁸⁾

そうなのだ、古代ギリシャ劇以来、悲劇のヒーローはすべからく王侯貴族であった。彼らは家庭内の骨肉の争いに苛^{さいな}まれ、しかしその家庭は王家、したがって悲劇は国家の運命を左右するスケールの大きな物語を形成した。主人公^{ヒーロー}が市井^{しせい}の人物になるのは、18世紀の市民社会とともに誕生した文学ジャンルたる「小説」からである。

トム・ストッパードの描くローゼンクランツとギルデンスターンは、現代の大衆社会の凡人代表、彼らは悲劇のヒーローたり得ず、あわれ、闇の世界へ消えていく⁴⁹⁾。

お話は『ハムレット』の5幕に戻って、国王の太鼓持ちのオズリックが訪れ、

48) その他、小林秀雄の短篇「おふえりや遺文」(1931年)、久生十蘭^{ひきお じゅうらん}のこれも短篇「ハムレット」(1946年)、大岡昇平は長篇小説『ハムレット日記』(1955年)、福田恆存も長篇の『ホレイショール日記』(1979年)、また横内謙介の戯曲『フォーティンプラス』(1990年初演)など、枚挙にいとまがない。皆、ハムレットないしは『ハムレット』に文句をつけながら、この矛盾の固まりたる王子が好きなんだなあ、つくづく思わされる。

49) 『ハムレット』の演出も急速に“大衆化”されてきた。映画を例にとれば、フランコ・ゼフィレリ版(1990年)やケネス・ブラナー版(1996年)の王子はいかにも庶民的で親しみやすいが、どうも天下国家を論じる政治劇の趣には欠ける。僕はローレンス・オリヴィエ版(1948年)とクリゴリー・コージンツェフ版(1964年)の王子がいちばんロイヤル・プリンスの風格と気品と知性、さらに冷徹さをそなえているように思えて、しっくりくる。

クローディアスがハムレットとレアティーズのフェンシングの試合を望んでいると伝える。⁵⁰洒落者のレアティーズはパリで剣術の腕を上げてきたとか。だが、神学を学んでいたハムレットも剣の修行は欠かしていなかった、よし、受けたとう、と。ほほう、王子はやっぱり、ロマン派の青白き、憂鬱症の、ウェルテル⁵⁰)のようなベタの文化系男子ではなさそうだ。

でも、胸騒ぎがする。いや、気にすまい。雀一羽落ちるのも神の摂理だ。と、イングランドから帰ってきてからのハムレットは狂乱の王子にあらず、どこか達観したように落ち着いている。

いよいよ大詰め、フェンシングの試合である。レアティーズは毒を塗った剣で戦うが、なかなかハムレットに斬り込めない。クローディアスは、喉が渴いたであろうと、ハムレットに毒杯を飲ませようとするが、えっ、ガートルードがそれを横から取って、ゴクリ。焦ったレアティーズは、休憩の間に王子に斬りつける。ハムレットは怒って、レアティーズの剣を奪い、彼に傷を負わせる。ガートルードが「お酒に毒が入っている」と言って、バタリと倒れる。虫の息のレアティーズが、自分もハムレットももうお仕舞いだ、と。事情を知ったハムレットは国王を一突き、さらに「近親相姦⁵¹)と人殺しの罪を犯したデンマー

50) もちろん 25 歳のゲーテが書いた大ベストセラー『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774 年)の主人公のこと。ロマン派のハムレットが横滑りすると、ウェルテルになる。もともと、彼の悩みは愛するシャルロッテとの恋ゆえ、最後はピストル自殺する。英雄ナポレオンはこのめめしい恋愛小説を 9 度読み、後にゲーテに面会している。

51) 第一独白以来何度も出てきた「近親相姦の (incestuous)」罪を犯しているという話がこの中でも繰り返されている。当時は、弟が兄嫁と結婚するのは近親相姦とされた。チューダー朝の第二代国王ヘンリー八世(在 1509-47 年)は、早世した兄アーサーの妻だったキャサリン——16 世紀のヨーロッパ最強国のひとつ、スペインのお姫様——とローマ教皇からの特免状を得て婚約、後に結婚した。だが、6 歳年上のキャサリンがそろそろ子供を産めない年齢に達すると、彼女の侍女アン・ブーリンから結婚を迫られたこともあって、離婚を考えるようになる。むろん教皇は反発、ついにローマと決裂して、ヘンリー八世は首長令(1534 年)を發布し、「わが国では俺が宗教界でもトップだ」と。これがご存じのとおり、イングランドの宗教改革である。政治と宗教と血縁の話は複雑というか、その時その時のご都合主義の屁理屈というか。王族の結婚は、個人の愛の賜物にあらず、何よりも政略のため、また嫡男を得て王家の断絶を避けたいため。

ク王よ、毒を飲み干せ」と叫んで、クローディアスに杯をあおらせる。

エリザベス朝で大流行した「復讐劇」の段取りである。主要人物はほぼ全員死ぬ。今日でも犯罪を描く^{エンタメ}娯楽作品は、大向こう^{うな}を唸らせる流血のクライマックス・シーンが定番だ。大衆を相手にした人気作家シェイクスピアも、そのパターンに^{のっ}則っている。

ハムレットはホレーシオに、事の顛末^{てんまつ}を後世に伝えてくれ、またデンマークの王位を継承するのはフォーティンプラスだと告げ、「あとはただ沈黙(The rest is silence.)」と言い残して、絶命する⁵²⁾。

この芝居は「そこにいるのは誰だ？(Who's there?)」という問いかけで始まり、ハムレットは「あとはただ沈黙」の決めゼリフで事切れる。これは「自分とは何ぞや」を模索する、アイデンティティ・クライシスをテーマにした作品だ——な～んで説は、いかにも格好はいいけれど、まあ、自意識の強い現代の後づけ解釈であろう。シェイクスピアがどこまで自覚的に書いていたか。

シェイクスピアは終生、勸善懲悪の芝居を書かなかった人である。勇氣^{りりん}凛々の英雄譚も好まず。むしろ国王なり英雄將軍なり、国家のリーダーたるべき人物の裏側の心情を、「深き心の闇」を追究しつづけた作家である。リア王もマクベスもオセローも皆、不完全な、もっといえば愚か者ばかりだ。

なのに、総じて研究者も演劇人も愛読者も、ハムレットだけは「きれいなヒーロー」と思いたがり過ぎていないか。なんとか王子をダメ人間の範疇^{はんちゆう}から救出しようとしている。けれどもハムレットは、神経質で、恋人に優しくできず、マザコンの気があり、世間知らず、人間関係が下手で、体制に与せず、行動力に欠け、決断力なく、ブツブツと心の中で独り言つだけ——それでも十分、青春の「自分探し」などとうの昔に終えた、現実に否が応でも適応した行動をと

52) ハムレットに限らず、沙翁劇の登場人物は、「あゝ、俺は死ぬ～」と言ってからもうひとくさりのゼリフが長い。それが不自然で嫌いだという人が多いのは、むべなるかなである。ちなみに、わが同居人は「あたし、外出するから」と言ってからが長い。ある時、僕が「ハムレットが死ぬ前の長ゼリフみたいだ」と言ったら、「それ、誉められたんだよね」と。はいはい、長生きしてください！

らざるを得なくなっている、しかしどこか満たされぬ思いを胸に秘めながら日々の生活に追われている中年以上の人たちの心にも、^{そくそく}惻々と訴えてくるものがある。いいじゃないか、不完全な主人公で！

おっと、王子が死んでからもう一場ある。時々チョロチョロと顔を出していたフォーティンプラスが入場してくる。ホレーシオからハムレットの遺言を伝えられ、そうか、俺がデンマーク国王かとうなずき、ならばハムレットを武人にふさわしく葬送せよと命じて、長かった芝居の幕が下りる。

このフォーティンプラス、『ハムレット』を3時間に収めようとする、真っ先にカットされる人物である。王位継承がインパクトを持たなくなった現代にあってはお邪魔虫。ハムレットの死を悲しむ余韻をそぎかねない。だが、どんなに乱世を描いても、終幕には秩序の回復者が現れて平和な世に戻るのが、エリザベス朝演劇の原則。これは中世のキリスト教的な摂理史観がルネサンスの時代になってもまだ支配的だったからだとか⁵³⁾。

けれども、クローディアスとガートルードが死んだ後に、ハムレットが次の国王はフォーティンプラスだと宣言したわけだから、このノルウェー王の甥っ子はデンマーク王家と血縁関係にあったはず。グローブ座の観客たちは、作者が舌足らずに、というより意図的に隠しつつ描いているとも思える「機械仕掛けの神」をめぐる家系図を想像しながら、王子の次期国王指名のカラクリを楽しんでいたのではないだろうか。

前述したように、『ハムレット』初演の数年後にエリザベス女王が崩御、王位は断絶したテューダー家からスコットランドのステュアート家に渡る。家系図をたどれば、エリザベスの叔母でスコットランドに嫁いでいたマーガレット、その孫でエリザベスの宿敵だったメアリーの息子が、新イングランド国王ジェームズ一世として即位する。

53) E. M. W. ティリヤード『エリザベス朝の世界像』磯田光一・玉泉八州男・清水徹郎訳、筑摩書房、1992年(原著1943年)参照。古くなったという人もいるが、シェイクスピアが従っていた宇宙観を論じて、今なお読んでおくべき基本図書である。

ハムレットの悩み

終幕のフォーティンブラス曰く、「記憶をたぐれば、この国には多少の権利がある」。ジェームズも長年、同様の大望を胸に抱いていたはずである⁵⁴⁾。

(2019年7月 脱稿)

54) 政権の交代が平和な時代の到来を告げるとは限らないのが、世の常。ヤン・コットは(注1)でも引用した『シェイクスピアはわれらの同時代人』で、シェイクスピアがもし“神の死んだ”現代に生きていたら当然摂理史観など考えず、秩序の回復を謳うエンディングにもしなかったであろうと論じる。彼は第二次大戦中にヒトラーに対するレジスタンスに従事し、さらに戦後はスターリン支配に苦しんだポーランドの演劇人である。彼の語る未解放で不条理な世界には、肌感覚がともなう。ヤン・コットの現代的解釈は一世を風靡、彼の批評に刺激を受けた舞台では、フォーティンブラスはファシストの軍服を着て登場し、王座に登って高笑いして幕が下りるなんて演出が目白押しであった。